H31年　3月　20日

特別養護老人ホーム　飯塚なごみの里

見守りケアシステムM1導入成果報告

発表者:生活相談員　山内　智平

導入施設概要

社会福祉法人　慈風会

飯塚なごみの里

地域密着型介護老人福祉施設

所在地：　山形市飯塚町

入居定員：　29名(3ユニット)

平均要介護度：　3.9

介護職員数：　20名

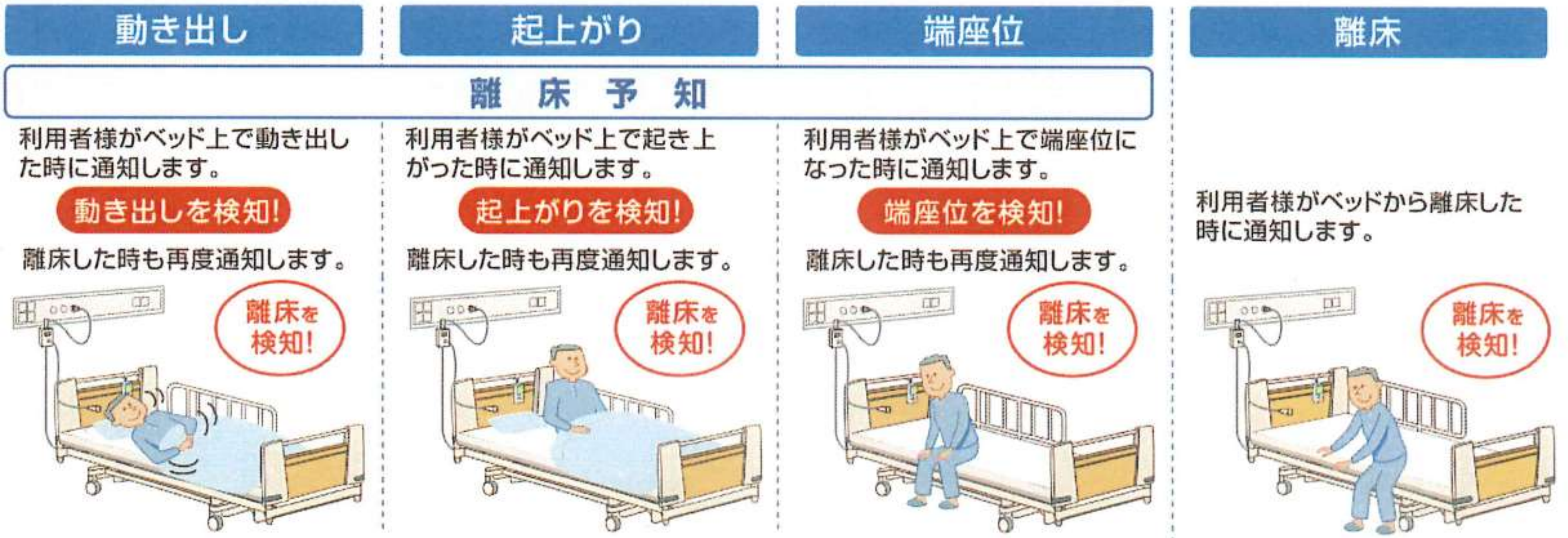
併設事業所：　小規模多機能型居宅介護

導入機器概要

《見守りケアシステムM1（フランスベッド）》

ベッドに内蔵した荷重センサーが、入居者のベッド上の体動や離床動作を正確に感知し、ナースコールへ通知するシステム。
手元コントローラで見守りエリアやアラーム感度の設定が可能。

［離床予知のアラーム設定］



使用者概要

《名前：　入居者　Aさん(女性/94歳)》

［基本情報］

・入所日　：平成30年11月29日
・要介護度　：3
・現病、既往歴：　大動脈弁狭窄症、慢性心不全、糖尿病、両膝人工膝関節置換術
・障害高齢者の日常生活自立度：　B1
・認知症高齢者の日常生活自立度：　Ⅳ

・移動：　車椅子（自操可能）

歩行は何かに掴まれば数歩程度は可能だが、ふらつき強く、日常的には行っていない。

・移乗動作：　自力にて可能だが、バランス崩しやすく見守り必要。

・食事：　自力摂取

・排泄：　日中は居室トイレ、夜間はベッド脇にポータブルトイレを設置して使用。ズボンの上げ下げが不十分な時や、移乗時バランスを崩しやすいため、見守り～軽介助必要。尿意、便意しっかりとしており、失禁もない。

・認知症の診断はないが、年相応の認知力低下あり。生活に支障をきたすようなBPSDはない。

・Aさん自身、危険への配慮が難しく、車椅子のブレーキを掛けずに立とうとしたり、ベッドから居室内のタンスや洗面台まで歩いて移動しようとすることがある。身の回りのことは自分でできると思っているが、実際は危険を伴う場面がある。

・トイレや気になること等がある時はナースコールを押すよう伝え、押す時もあるが、「大丈夫だ」と押さずに自分で行おうとすることもある。

［日常の過ごし方］

・朝は7時頃起床、夜は１９時頃就寝。

・朝、昼食後は1時間程度ベッドで休む。

・日中、ベッドで休む以外は、午前、午後共にレクリエーション活動に参加したり、食堂でＴＶを見て過ごしている。起きて過ごす時間は比較的多い。

・夜間、２～３時間おきにポータブルトイレに起きる。その他、居室タンスにある着替えや荷物等を取りに行こうとしたり、喉の渇きを訴えて、居室洗面台に水を飲みに行こうとすることがある。

［Aさんの居室］

機器導入前の対応

・入所した直後ということもあり、生活パターンや行動状況を把握するため、ベッドに休んでいる際は日中、夜間共に20～30分に1回程度様子を見に行った。その際Aさんに動きがある時は、訴えに合わせて声掛けやケアを行った。

・日中、居室に休む際や食堂へ起きる際等、トイレの声掛けを行い、Aさんがトイレを訴える前にトイレに行けるようにした。

・ベッド脇のAさんの目の届くところに『トイレや用事がある時はナースコールを押して下さい』と掲示した。

・居室タンスにある着替えや荷物等を取りに行こうとすることがあるため、着替えやAさんが普段使用する物はベッド脇の棚に置いた。

・居室洗面台に水を飲みに行こうとすることがあるため、ベッド脇の棚に水を入れた水筒を置いた。

機器導入の理由

・Aさん１人での移乗動作、歩行はふらつきが強く、転倒の危険が高かった。

・トイレ以外にも、Aさんの自発的な行動が多様にあり、入所した直後だったということもあり、生活パターンや行動状況を把握しきれなかった。

・Aさんが「自分でできる」という気持ちや、認知力の低下により、ナースコールを押さずにベッドから離れてしまうことがあった。

・入所翌日、夜間に水を飲みに行こうとしてベッドから洗面台まで伝い歩きし、転倒していたことがあった。

・職員としては、「また転んでしまうのではないか」という不安、「転倒しないように対応しなくては」という焦りが強くなった。

機器の使用状況

・入所してから5日目に『見守りケアシステム』を導入。

・離床予知のアラーム『起き上がりモード』で設定。

（ベッド上で起き上がった時、ベッドから離れた時の2回ナースコールへ通知）

［日中(7時～19時)の状況］

・ナースコールへの通知回数： ０～２回

・日中は起きて過ごすことが多いことや、ベッドに休む前にトイレ行く習慣ができたため、休んだ後にトイレに行こうとすることはなかった。

・時折「もう〇〇の時間だが？」と、起きようとすることはあった。

［夜間(19時～7時)の状況］

・ナースコールへの通知回数： ８～10回

・夜間は就寝後、２～３時間おきにベッド脇のポータブルトイレに起きていた。

・朝方が近くなると、身支度のため、着替えや洗面台、タンスに向かおうとする様子があった。また、時間の感覚が分からなくなり、夜中でも身支度をしようとする時もあった。

・足の痒みがあり、自分で軟膏を塗るために起きることがあった。

※機器導入前の対応は継続して実施

導入後の効果

［Aさんへの効果］

・ナースコールに通知があり職員が訪室すると、移乗動作、歩行等の危険を伴うような行動だけではなく、ベッド上、端座位で行うような危険を伴わない行動も多かったが、行動の内容を確認し、声掛けやケアを行えることで、転倒を未然に防ぐことにつながり、Aさんは安全に過ごせるようになった。

・転倒等の危険が伴わない行動の場合は、Aさんの「自分でできる」という気持ちを尊重し、自分で行うことを見守りできた。

［職員への効果］

・Aさんの睡眠状況やトイレの回数、気になること等、生活ペースや行動状況を把握できた。

・Aさんの状況確認のための訪室回数が減り、職員の体力的負担の軽減につながった。

・職員の「また転んでしまうのか」という不安、「転倒しないように対応しなくては」という焦りが軽減し、他入居者の介助も落ち着いてできるようになり、精神的負担の軽減につながった。

・ユニット担当の職員が対応できない時は、ナースコールを聞いて他の職員が訪室することができた。

⇒Aさんは、危険が伴う行動、伴わない行動も含めて、自発的な行動が多様にあり、転倒リスクも高いため、今後も継続して『見守りケアシステム』を使用と判断。

まとめ

飯塚なごみの里では、約１年前より『見守りケアシステム』を３台導入。

導入前と比較すると、

①センサーにより効率的に転倒等のリスクが軽減できたことで、職員の体力的、精神的負担の軽減につながった。

②入居者の生活ペースや行動状況が把握しやすくなり、そこに合わせた適切なケアを提供しやすくなった。

⇒入居者、職員の双方にとって、大きな効果が得られている。

今後も効果的に『見守りケアシステム』を活用していきたい。

飯塚なごみの里

http://www.jifukai.org

ご静聴ありがとうございました